

春日部福音自由教会 2020年5月24日 11:00 同時配信礼拝(ライブ配信礼拝)

聖書 使徒の働き 1章3節～11節

説教 『イエスはまた来られる』 小野信一牧師

おはようございます。お元気でいらっしゃるでしょうか。

2、3週間前にはツツジのピンク色の色が見えていましたけれども、今はそれがなくなっていて代わりに紫陽花の葉っぱが元気に伸びてきたように見えます。もうすぐ咲くのかな、というような思いになります。

新型コロナウイルスの感染の状況についてですけれども、私の第2の故郷と言っても良いブラジルの国ではですね、今1日に2万人の感染者が確認されているという状況になり死者も増えている、33万人の感染者だったでしょうか、そういう状況になってかなり厳しい状況になっていると聞いています。医師が「助ける患者」と「助けることができない患者」を選ばなければならないというような状態になる、そういうことが起こってしまっている、という風に聞こえてきています。

日本もそのようなことにならないように社会全体で取り組みを始めて色々なことをして2週間が過ぎました。これからまた新しい段階に入ろうかとしているところです。社会の活動もそうですけれども、教会もですね、またある意味では止めるよりも再開していく方が難しい面があるなと感じるところがあります。そういう中、今日は5月24日主の日の礼拝、復活祭から6週間が過ぎました。来週は5月31日聖霊降臨日となります。そのような主の日の礼拝を共に捧げております。使徒の働き1章3節から11節が朗読されました。“イエスはまた来られる”と題して御言葉を取り次がせていただきます。

もう一度共にお祈りを捧げましょう。

I. 祈り

天の父なる神様、この新しい一日、日の光を感謝いたします。私たちの命をあなたが見守り、私たちの歩みと、座るのも立つのも、そして心の思いも全てご覧になり、読み取ってくださるあなたがおられることを感謝します。今もう一度、離れた場所ではありますけれどもあなたの御前に集っていますので、一人一人が負っている重荷をあなたの前に下ろしてあなたにお任せすることができますように。主イエス様、あなたがよみがえられたこの週の初めの日、日曜日の朝、あなたの前に重荷を下ろし、あなたの恵みを頂いて出発するところからこの一週間を始めさせてください。今御言葉が開かれました。イエス様お語りください。イエスキリストの御名によってお祈りします。アーメン。

Ⅱ. 同じ有様で来られる主

墓の前で立ち尽くしていたマリア達に御使いが「分かっています」「あなたの方のことはわかっています」「だから恐れることはありません」と神のお心を伝えました。それから40日が過ぎ、今再び白い衣の二人の人が現れます。復活から40日目のことです。1章の3節にイエス様は復活後40日にわたって現れてくださったと書いてあります。今日は今年の復活祭の日から数えて6週間・42日後であり43日目です。来週の日曜日が7週間後になり50日目にあたります。来週は聖霊降臨日で洗礼式を予定していました。しかし残念ながら洗礼式を延期することにいたしました。今洗礼を願い備えている兄弟姉妹たちがいますので、その兄弟姉妹たちのために続けてお祈りください。そして、この6週間にわたって同時配信礼拝として行なってきましたけれども、来週から少しずつこの礼拝堂に集まる人を増やしていくことができないかと考えています。まずは同時に礼拝ができない方の中で、その中でも高齢の方や持病を持っている方もいらっしゃると思いますので、決して無理をなさらないで、現在健康でありリスクが低い方から、そして同時に礼拝ができない方から少しずつ集まっていきたいと思っています。祈りつつ進んでまいりましょう。

戻りますが、復活から40日目のこと、再び二人の人が現れます。そして言いました。「このイエスはまたおいでになります」「いま天に上げられるのをあなた方が見たこのイエス様はまた来られますよ」「今見たのと同じ有様で来られるのですよ」と天を見上げる弟子たちに告げました。イエス様はこの日、復活から40日経ったこの日、天に引き上げられ、それを弟子たちが見ている間に、見上げる間にだんだん雲に包まれていきました。ま、だんだんとは聖書に書いていませんね。ちょっと想像が入りますかね。そしてついに見えなくなると聖書に書いてあります。“だんだん”は聖書に書いてありませんけれども、まあ想像するに、地上と一緒にいたのに上げられていき、そしてだんだん高くなり、少しずつ雲に包まれていって見えなくなったのかな、それとも一瞬のうちにすぐ雲に包まれたのかそれは分かりません。とにかく雲がイエス様を彼らの視界から取り去り、彼らの目から見えなくなった。見えていたイエス様が雲に包まれ見えなくなった。その有様で「同じ有様で同じようにまた来られます」と御使いは言ったのです。ということは天の高い見えないうところから、ある時が来るとイエス様が来られて、その下って来られる姿を人々は見る、と言う事なのでしょう。最初は遠くてぼんやり雲に包まれているのかもしれませんが。上げられていったのと逆コースをたどって少し見えてきて、もしかしたら半分雲に包まれている、だんだん降りてきて、だんだん雲が消えていき、はっきり見えてきてついに、地上に降りて

こられるということでしょうか。それともまず最初は雲の中で空中にまず現れるということでしょうか。

イエス様が言われた御言葉の中にこういう言葉があります。「人の子が来るのは稲妻が東から出て西に落ちるようなものだ。そのように人の子は来るのです」イエス様が言われました。イエス様が来られます。実際そのことが起こる時いったいどんな様子なのだろうか？色々考えてみたり想像してみたりしますけれども、世界の東側、世界の西側、北半球南半球どこにどう現れるのか、私はもうその時が来たら全世界の人に同時にわかるのだろうと思っけていますけれども、どんな様子でということとははっきりとは言えないし、聖書の解釈もいくつかに分かれるところがあるかと思ひます。しかしはっきりしていることは《イエス様が再び来られる》ということです。私たちはその日を待つ者として生活しましょう。

「あなた方のことはわかっている」御使いが神様の御思ひを伝えました。再び御使いが現れて言ひます。「主イエスはまた来られます」。今私たちが置かれてるこの状況の中で、この日本の状況、世界の国々の状況の中、また埼玉県での状況、皆さんの会社が置かれてる状況、みんなの学校が置かれてる状況の中で、恐らくは5月31日まで学校がお休みになって6月1日から始まるだろうと言ひられています。もしかしたらまた変わるかもしれない。でもそのような予定でいま進んでいる。それらの様々な状況の中で、私たちは今日今ここで《主イエス様は、このイエスは、またおいでになります》という神様の約束を、御言葉を聞きます。そしてそれを心に刻みたいと思ひます。このイエスは天に昇っていくのをあなた方が見たのと同じ有様でまたおいでになります。その日が来るのです。

Ⅲ. その日は必ず来る

この使徒の働きはルカが書いた第二の書と言ひられています。ルカの福音書の終わり第24章とここがつながっていますが、そのルカ24章でイエス様は（復活されたイエス様ですが）イエス様ご自身が旧約聖書に基づいてご自分の事を教えてくださった。ルカの24章の44節ですね。そして「わたしについて聖書に書かれたことは必ず実現する」「すべて成就しなければならない」「そう実現しなければならないのだ」と言われたとルカは書いています。そしてイエス様が聖書を悟らせるために「彼らの心を開いて、そしてお話しして下さった」というのです。私たちは聖書を持っています。しかし聖書を理解し、悟るためにはイエス様によって心を開いていただくなければなりません。イエス様が心を開いてくださる。すると《聖書を悟ることができるようになる》というのです。『モーセの律法と預言者たちの書と詩篇』と書いてありました。『律法と預言者と詩篇』すなわち旧約聖書全体ということですから。聖書は必ず実

現するのだ、とイエス様が断言し約束されたのです。その通り、聖書の約束の通り、主イエスキリストは再び来られます。この私たち地球の民の、混乱したり、不安になったり恐れたり、何とかしようと苦闘したり努力したり、協力したり、また協力できずに対立したりしている、そんな私達地球の民の世界に必ず主は再び来られます。今日私たちはそのことをもう1度心に刻んでおきたいと思います。

この世の状況は色々変化する。そしてどうなるか分からない、分からないことが起こる、もっと混乱や不安が大きくなるかもしれません。もっと悪い時代が来るかもしれません。しかし主は再び来られます。この天と地を新しくする主が必ず来られます。この世この時代が終わって新しい天と新しい地がやってくる日、その日が来ます。主の日が必ず来るのです。

IV. 空を見上げて

弟子たちは天を見上げていました。私たちも時に天を見上げたいと思います。弟子たちにとってはさっきまで一緒にいた、会話をしていた、顔を見ていたイエス様が、地上から上げられ、地面を離れて高く上げられて行き、そしてついに見えなくなった、雲に包まれて見えなくなった、それで上を見ていたのです。天を見上げていました。今弟子たちの目にはこのとき、イエス様の姿はもう見えていません。ただ空を見えます。でも弟子たちの心はもちろん落胆してはいません。もうイエス様は見えるところにはいないのです。でも見えていない、でもと言うか見えていないからこそ、というのか「今イエス様は本当に天にいる方として生きている」そう弟子たちは思うことができた、そう信じていることができていたのです。「イエス様は見えない、でも共にいてくださる。見えない、でも見ていてくださる。」そんな思い。弟子たちが天を見上げる思いとは、そんな思いではなかったでしょうか。

皆さん散歩したりしてますでしょうか。外を歩いたりしているでしょうか。私たちも空を見上げてみましょう。

私は最近、庄和のちょっと離れたところの田んぼの周りに行って歩くことが増えました。空が青いととても綺麗です。田んぼにその空が映っています。今マレーシアでもイギリスでも「青空が綺麗だ」って聞こえてくるのですね。マレーシアでもイギリスでもこんな青空見たことなかったっていうような空が綺麗に見えている。6週間8週間、それ以上の期間みんなが車に乗らない日々が続くと青空が返ってくるっていうことが世界のいろんな場所、特に都市ですね、で起こっているということのようです。それはともかく、私達も空を見上げてみましょう。イエス様がどんな様子で雲に包まれて上げられたのだろうか、弟子たちがどんな風にイエス様と別れて見送ったのだろうか、どんな思いで弟子たちは空を見上げたか、そのことを想像し、そして天に

いるイエス様を思い「天にいる見えないイエス様が、今私と共にいてくださる」そのことを思いましょう。空を見上げて、そして再び来られるイエス様を思いましょう。この私たちのこの世界にもう一度イエス様が来てくださる、それは素晴らしいことです。どんなふういつ、どうやって来られるのだろう、色々想像します。どんな様子なのか、いつなのか、でも分からない、分からなくていいこともあるのです。いつとかどんな時とかいうことは知らなくて良いのです。「それはあなた方のものではないよ、それを知ることは」とイエス様は言われました。7節ですね。「それは知らなくて良い、ただ必ずその時が来ることを覚えていなさい」ということです。

弟子たちはイエス様と最後に過ごした時に「今この時、主よ、国を再興してくださるのですか」と尋ねました。でもイエス様は「いつとかどんなときなのかとかは知らなくて良い」と言われたのです。「それがいつになってもいいように生活しなさい」ということです。イエス様が再び来られて国を、王国をもう一度形作ってくださる、その時が来ます。でもそれがどんな時なのか、いつなのかは知らなくて良いのです。いつになってもいいように生活しなければいけません。

「主の日が来るのは盗人のように来る」ともイエス様は言われました。つまり前もってはわからないということです。イチジクの葉を見て季節を見分けること、時の印をキャッチすることは大事なことです。でも前もって言い当てたり前もって分かるということではありません。いつ主人が帰ってきてもいいように、正しい仕事の仕方をする、正しい生活をする、あるべき仲間との関係をいつも持っていなさい、ということ。

“その日”という言葉が聖書に時々出てきます。主が来られる日のことです。終わりの日のことです。「その日その時は誰も知らない、知らなくて良い、ただ父だけが知っておられる」とイエスは言われました。知らなくてよいのです、それがいつか。その日それは終わりの日です。主の日とは裁きの日でもあります。また苦難の日、苦難の時代がやってくる時のことでもあります。しかし一方で、“主の日”とも呼ばれる、その日は希望の日です。キリストの日、それは回復の日です。新しくなる日です。すなわち終わりの日であると同時に始まりの日でもあるのです。天を見つめる弟子たちに御使いが言います。「なぜ天を見上げて立っているのか、このイエスはまたおいでになるのだ、なぜあなた方はいつまでも天を見上げているのですか」御使いは言います。私達は弟子達がしたように天を見上げたいと思います。そしてイエス様を思い、イエス様が再び来る日のことを思いたい。

けれども「ずっと天だけ見てればいいってことじゃない」ということです。もう一度地を見る、天を見てからもう一度地を見る「地上のことに向かわなければならない」

ということです。「いつまでも天を見上げているだけではいけない」「なぜ天を見上げて立っているのですか。主が来るのを待ちなさい」「しかし空を見て待っているだけでは違う、あなた方にはやるべきことがあるでしょう」というわけです。

なんででしょう、私たちのすべきことは。あなたのすべきこととは何でしょう。

V. 小さい火となって

少しこの前の所に戻りましょう。6、7、8 節で、いつどんな時イスラエルの王国が再興されるのか「それは知らなくて良い」とイエスは言われました。そしてこう言われたのです。「しかし聖霊が下ると、聖霊が臨むとあなたがたは力を受ける」それが主の約束でした。1 章の 8 節です。その時、力を受けたとき「あなたがたはわたしの証人となります」と、イエス様は言われました。聖霊を迎えて力を受けて証人となる、証言者となる、主イエスの証言者となる、その使命が弟子たちに与えられました。その使命が私たちにもあります。榊原先生という先生はこう語っていました。「修道院時代のような隠遁生活だけでなく、近代の大衆伝道の大集会だけでなく、一人一人の信者が地の塩、世の光として証をする伝道がこれからは必要になるでしょう」そう言っておられました。これは何十年か前に語られたことです。今もその通りだなと思います。一人一人が地の塩として地で生きる、地に溶けて人々の間で生きる、一人一人が世界の光として小さな一つ一つの灯火として燃え続ける、あるいは主の光を映して、反射して生活する、私の火は小さい火、でも光りましょう。「わたしは小さい火」という賛美の歌に歌っている通りです。『私は小さい火、光りましょう、隠れましょう、いいえ ひかりましょう』という歌の通りです。

2020 年度の年間聖句、2020 年度の御言葉を改めて見てみましょう。週報にも最初のページに毎週載せられています。マタイの 5 章の 16 節。この 2020 年度の始まり、ある意味では訳の分からない状態の中でいつのまにか始まったような 2020 年度でしたけれども、私たちはこの御言葉を頂いて出発しています。「このようにあなたがたの光を人々の前で輝かせなさい。人々があなたがたの良い行いを見て天におられるあなたがたの父を崇めるようになるためです」マタイ 5 章 16 節。2020 年度の御言葉です。

先日ですね、母が、私の母は昭和 17 年生まれなのですが 5 月生まれで今年は誕生日が丁度母の日でした。それでインターネットで、Zoom で離れてですけどネット上で集まってささやかな誕生会をしました。調布の実家のある、調布のケーキ屋さん、春日部のケーキ屋さんでそれぞれイチゴのケーキをふたりぶんずつ買って、ネット上に集まったということですね。一応顔が見えて声が聞こえる、そういう小さな会をしました。その前に姉から LINE で母が「自分の分の人工呼吸器は 他の人に譲っ

て良い」と言っていたというようなことを姉から聞いていたのですね。それでその集まりの時に母に「そんなこと言っていたんだってね、偉いね」って言いました。そして「私は、死ぬのは大丈夫。他の人に譲ってもいいんだ」って言うのですね。「ただ痛いのは嫌だ」とか「苦しいのは嫌だ」「痛いのと苦しいのでなければ死ぬのはいいのよ」とか言うのですよ。「でもそれって、一番苦しい時の、息が苦しい時用の物が人工呼吸器なんですけどわかっていますか」みたいなことを言ったのです。わかっているのか不明なのです。多くの方は実際に使ったことがない、ほとんど、ですよ。もしかしたら手術や重病経験して使ったことがある人もいるでしょう、けれども多くの方は人工呼吸器を使ったことがない、自分の体がそれを使う状態にまだなっていないわけですから。でも「私の分の人工呼吸器は他の人に譲って」と言えるっていうのは、何て言うんでしょう「なかなかやるな」と言いますか、言い方はどうなのでしょう。「大したものだ」と言いますか、ちょっと何と言ったらいいかわからないのですけれども「そんなふうには言えない」と思う人たちにとっては“小さな光”なのではないかなと思うのです。

私たちは一人一人、主を待つものとして、主に希望を置く者として、復活の主を信じまた私たちの復活を信じる者として、復活の力を未だ知らないでいる人たちに“小さな光”となっていきましょう。

VI. 主よ、来てください

もう一度年間聖句をご一緒に読みましょう。最初の句点まで結構ですけど、よかったら一緒に読んで頂ければと思います。マタイの5章16節、“このように”から最初の句点までにしましょうね。ではどうぞ。“このようにあなたがたの光を人々の前で輝かせなさい”。「わたしの証人となります」イエス様が言われました。私たちは天を見上げ、そしてもう一度地を見ましょう。主が来られます。しかし主が来られるまでの間、私たちには限られています。時間があります。生活があります。どれだけの時間か分かりませんが、主が来られるのは明日かもしれません、1日後かもしれない、100日後かもしれない、100週間後かも100年後かもしれません、それは分かりません。しかし主が来られるまでの間、私たちにはできること、なすべきことがあります。自分の仕事を精一杯しましょう。家の事や家族のためのことを精一杯にしましょう。そしてどんな変化・災い、さらに世の終わりに向かう困難な時代が来ても、変わらない希望を抱く者として光を受け、光を放ちましょう。このイエスはまたおいでになります。その約束に対して私たちは何と言いましょうか。「主よ、来てください」と言いましょう。

黙示録の 22 章に 3 回「わたしはすぐに来る」というイエス様の言葉があります。新約聖書最後の章です。その章に 3 回「来てください」とも繰り返されています。これが私たちの祈りです。「イエス様来てください」と言いましょう。主を待つのです。来られるのを待ち望みます。「イエス様来てください」と待つのです。

皆さんどんな思いでしょうか「イエス様来てください」という祈りが今日あるでしょうか。もしかしたら「イエス様、今は来ないでください」「今来られたら私困ります」と言いたいことがあるかもしれません。「今のこの私、この生活、この心の思い、今見られたら困るのです」そう言いたくなる気持ちの時ありますよね。「主よ、今は来ないでください、困ります」そういう時があるだろう、でもそうでなく、「主よ来てください」と言いましょう。「ご覧ください、来て見て助けてください、新しくしてください、この私を、この世界を、新しい天と新しい地を待ちます、主よおいでください」と言いましょう。

私たちは主を待ち望んで生きます。この世界に、自分の心に、生活に主が来てくださるように。自分の生活や態度や行動に入れ替えるべき何かがあるかどうか、今日もう一度見直しましょう。「主イエス様よ、どうぞ来てください」。そう目を上げ、心を上げ、待ち望む者として私たちは生きていきます。お祈りを捧げましょう。

VII. 終わりの祈り

主イエス様、あなたは生きておられます。今私たちの目には見えませんが生きておられます。あなたは天に昇られる前「わたしはまた来る」とお約束してくださいました。「また来てわたしのもとに迎える」と。ですからあなたを待ち望みます。この世界の混乱と恐れと病の中で、協力しているような、分断されているような人と人、国と国のありようを、あなたはどうぞ覧になられているでしょうか。あなたを待ち望みます。主よ、助けて下さい。私たちが地球上で助け合い、支え合うことができるよう、憐れんでください。主イエスよ、来てください。私たち人間を新しくし、天と地を新しくしてください。地上にある間、一人一人が精一杯生き、輝けますように。地の塩、世の光として、死んで、生きて、小さな光を世に、人々に届けられますように。主イエスキリストの御名によってお祈りします。 アーメン